

Carson McCullers における母と娘

— “Sucker” から *Clock Without Hands* へ —

佐々木 真理

I はじめに

1961年に出版された Carson McCullers の最後の小説 *Clock Without Hands* を待ち受けていたのは、数多くの賛辞と、そして数多くの失望だった。Margaret B. McDowell が端的にまとめているように、未だ記憶に残る McCullers の処女作の衝撃、*Clock* が長い空白期間を経てようやく発表された小説であったこと、そして、McCullers 自身病に冒され、おそらくは死に直面しているという事実が作用しあった結果、幅のある評価が生まれたのは間違いないだろう(96-97)。だが、時代を経るにつれ、McCullers といえやはり *The Heart Is a Lonely Hunter* や *The Member of the Wedding* が論じられることが多く、*Clock* については否定的な評価が多数を占めるようになった感がある。¹ 近年、Rachel Adams や Gary Richards に代表される、クィア批評からの McCullers の読み直しが進み、やや *Clock* に対する評価が変わってきたとはいえ、Jester Clane と Sherman Pew という二人の少年の関係にのみ焦点が当てられ、作品全体の読み直しにはつながっていないように思われる。

否定的な評価に共通しているのは、“unresolved disjunction or disharmony between the novel’s two plot strands” (James 145) を指摘し、作品の構成に不満を唱える点だ。確かに、J. T. Malone を中心に生と死を見つめる物語と、Jester と Sherman を中心に少年たちを描く物語のつながりはゆるやかで、登場人物たちのそれぞれの物語を結ぶ役割の Singer を中心におくことで成功した *Lonely Hunter* と比べると、物足りない構成となっているのは否めない。だが、McCullers が長編においては初めて、親子関係という主題に正面から取り組んでいることを考えると、McCullers を読む上で *Clock* の持つ意味の大きさを無視することはできないのではないだろうか。そこで、本稿では、McCullers の初期から晩年にいたるまでの短編を含めた作品における変容を

たどりつつ、*Clock* を読み直すことを目的としたい。初期短編の主題が *Clock* においていかに変奏されているかを考察することで、McCullers 作品の基盤となる構造と主題が見えてくるだろう。

II 母の不在？

Clock が McCullers の他の作品と何よりも異なる点は、親子の関係性に焦点があてられていることだ。McCullers の代表作 *Lonely Hunter* や *Member* においては、親が登場することはあってもその存在は希薄で、親と子の関係性が物語の中で大きな要素となることはなかった。しかし、これは、思春期から大人への移行期におけるセクシュアリティとジェンダーが絡んだ自己同一化の問題こそが McCullers の作品に共通する主題だとするならば、奇妙な設定だといえる。思春期の少年少女を描こうとするとき、親への反発であったり愛情であったりといった親との関係性を明確に提示することで、揺れ動く彼女/彼らの心理描写につなげるという構成を取るほうがむしろ自然だからだ。だが、McCullers はそのような関係性を曖昧にほのめかすにとどめ、唐突にそして性急に少年少女たちの苦悩へと読者を誘う。例えば、*Lonely Hunter* の Mick と母親は常にすれ違うだけで、母と娘の間の確執や葛藤が描かれることはなく、Mick が抱く寂しさのようなものがぼんやりと示されるにとどまる。Mick の母は下宿人の世話と家計のやりくりに追われ、常に “she looked as though she had a lot on her mind” (40) の状態で、娘が泣いているのを見かけても何があったのか尋ねる余裕すらない。さらに、Mick がボーイフレンドの Harry と肉体関係を持ち、“It was her Mama she was thinking about” (238) と母親と話をしたいと思ったときでも、母親が “Quit frowning like that, Mick” (238) と一方的に自分の用件だけを語り立ち去っていく姿が描かれるだけで、Mick の母親への恨みと怒りあるいは思慕といったものがそれ以上語られることはないのである。*Member* や *The Ballad of the Sad Café* においても同じことが言える。Frankie と Miss Amelia のそれぞれの親との関係性は、親の不在や親との希薄なつながりが軽く触れられるにとどまり、あくまでも背景を流れる秘かな通底音としての機能しか果たしていない。

このような親との関係への不自然なまでの言及の回避は、特に、母親の不在といった点から McCullers 研究では論じられ、伝記的事実に即して解釈されるか、あるいは南部における女性らしさの規範との関連で考察されてきた。

前者の代表としては、“a happy, secure mother-daughter relationship in her published fiction” (Carr 417) を McCullers が描くことはなかったのは、McCullers 自身の母との強い絆に原因があると指摘する Carr が挙げられる。²

後者では、女性らしさの規範を内面化している母は娘を抑圧してしまうため、娘が主体性を獲得するには作品における母の存在は障害となると主張する Louise Westling が代表だろう。³ だが、果たして、本当に McCullers の作品に母は不在なのだろうか。あるいは、McCullers は意図的に母の表象を避けてきたのだろうか。

ここで注目したいのが、McCullers の晩年に発表された短編 “The Haunted Boy” である。Clock の出版に先立ち、1955年に発表されたこの短編では、少年が主人公であるという点、主人公が憧れる年上の少年が登場する点がそれまでの作品と共通しているが、主人公の悩みや不安が、憧れの少年との関係からではなくむしろ母親との関係と直結したものとして語られている点が大きく異なっている。主人公の Hugh は “the other time” (164) の記憶に悩まされているが、それは自殺を図った母親が浴室で血まみれになって倒れているのを発見した瞬間なのである。Hugh は母親が退院した今となっても、帰宅したときに母親が不在であると、どうしようもない不安に駆られてしまうのだ。そのような Hugh の心理状態は、以下のように描写されている。

... he was thinking about “the other time” and the grudge that had started when he saw the blood and horror and felt *why did she do this to me*. He thought of the grudge against the mother he loved the most in the world. All those last, sad months the anger had bounced against the love with guilt between. (174)

母親の不在が生み出す “creepy and odd” な静けさを背景に、Hugh が母親に抱く “grudge” と、罪の意識と愛情が絡み合った “anger” が浮き彫りにされていくのである (171)。

このように、“lover” (= Hugh) が “beloved” (= 母親) に裏切られたと感じ、強い怒りや恨みを抱いてしまう、という展開は、McCullers が初期作品から一貫して追及し続けた主題である。例えば、Ballad における Miss Amelia と Marvin Macy の関係がその代表として挙げられるだろう。Miss Amelia に対する Macy の愛は報われることなく、Miss Amelia から残酷な仕打ちを受け

た Macy は深く激しい恨みを抱くようになり、結末の決闘へとつながっていくのだ。“lover” と “beloved” とのこのような複雑な関係は、*Ballad* の中で次のように説明される。

There are the lover and the beloved, but these two come from different countries. . . . The beloved fears and hates the lover, and with the best of reasons. For the lover is forever trying to strip bare his beloved. The lover craves any possible relation with the beloved, even if this experience can cause him only pain. (417-18)

しばしば引用される有名なこの一節において語られる “lover” と “beloved” との決して対等になりえない関係、“lover” の傷つきやすさとそれゆえの激しい怒り、そして “beloved” の暴力的なまでの残酷さは、まさに “The Haunted Boy” の Hugh と母親との関係に重ね合わせることができる。前述したように、McCullers は *Clock* にいたるまで親子関係への言及を回避してきたため、“lover” と “beloved” との関係が母と子の関係という視点から論じられることはなく、“archetypal portraits of human alienation” (Adams 552) として、つまり孤独やコミュニケーションの不可能性といった主題として、McCullers の研究においては論じられてきた。だが、“The Haunted Boy” が明らかにするように、“lover” と “beloved” との関係が生み出す孤独や疎外感という McCullers の主題の背後には、母と子の関係が原型として潜んでいるといえるのではないだろうか。

もちろん、McCullers が特に母の存在を作品で取り上げるようになったのは、McCullers 自身の母親が死去した後のことであったため、“The Haunted Boy” におけるこの伝記的事実の影響は無視できないものがある。⁴ おそらく、物理的にも精神的にも依存していた母親が生きている間は、作品において母の存在を描くことはできなかったのは当然のことなのかもしれない。しかしながら、“The Haunted Boy” に描かれる Hugh と母親の関係が示すように、実は、McCullers は “lover” と “beloved” との関係に置き換えて、さまざまな作品において親と子の、特に母と子の関係を追求し続けてきたのである。

さらに注目すべきは、McCullers の焦点が “The Haunted Boy” のように “lover” の側に常にあるわけではなく、“lover” の心理の変容を追いつつも、

“beloved” の後悔や罪悪感といった心理にも向けられていることだ。その最たる例が初期を代表する短編 “Sucker” だろう。語り手は16歳になる少年で、4歳年下の従兄 Sucker と一つ屋根の下で暮らしている。Sucker は、“... Sucker thought anything I did was always swell” (9)、“Sucker used to always remember and believe every word I said” (9) とあるように、語り手の少年 Pete を心から崇拝している。つまり、Pete が “beloved” であり、Sucker が “lover” にあたる。Pete は Sucker の好意を嬉しく思いつつも、ちょっとしたことが原因で Sucker の心を弄び、“No you don’t know when you’re not wanted. You’re too dumb. Just like your name — a dumb Sucker” (17) と深く傷つけてしまう。傷つけられた Sucker は “His eyes got narrow and his fists shut. There had never been such a look on him before. It was like every second he was getting older. There was a hard look to his eyes you don’t see usually in a kid” (17) とあるように、それ以降すっかり人が変わったように心を閉ざしてしまうのだ。Pete は、“It seemed awful to me that I had talked like that to a kid only twelve . . . I told myself I would go over to him and try to make it up” (17) と深く後悔するが、2人の仲が元通りになることはない。“Now that Sucker has changed so much it is a little hard to remember him as he used to be . . . If I could have seen ahead maybe I would have acted different” (10) と、Pete は自らがふるった精神的な暴力に対して強い後悔と罪悪感を抱き続けることになる。

孤独や他者とのコミュニケーションの不可能性を主題とする代表作である *Lonely Hunter* においても、“Sucker” と同じく “lover” と “beloved” の関係性が語られている。主な登場人物の一人 Mick には、Mick を慕う Bubber という弟がいる。ある日、Bubber が Baby Wilson という少女を誤ってライフルで撃ってしまうという事件が起こる。Mick はふとした出来心で、怯えて隠れていた Bubber を “They got a lot of people hunting for you . . . They got little electric chairs there — just your size. And when they turn on the juice you just fry up like a piece of burnt bacon. Then you go to Hell” (145) と脅かしてしまうのである。恐怖にかられ家出をした Bubber が連れ戻された後、泣きながら眠りについた Bubber に寄り添い、Mick は以下のように Bubber への愛情を再確認し、自分の行為を深く後悔する。

In the dark she put her arms around him and held him very close. She touched him all over and kissed him everywhere. He was so soft and little and there was this salty, boy smell about him. The love she felt was so hard that she had to squeeze him to her until her arms were tired. In her mind she thought about Bubber and music together. It was like she could never do anything good enough for him. She would never hit him or even tease him again. (153)

だが、時すでに遅く、BubberはSuckerと同じようにすっかり人が変わったようになり、Mickとの間に存在した信頼と絆は消えてしまう。Mickは自らの行為を反省するが、過去の絆を取り戻すことはできない。ここで、McCullersは“Sucker”と同じく、“lover”(= Bubber)の傷つきやすさと同時に、“beloved”(= Mick)の後悔と罪悪感に焦点をあてているのである。

Bubberに対するMickの愛情が、まるで子供に対する母親の愛情のように表現されているように、また、“The Haunted Boy”において明らかにされるように、McCullersは“beloved”を常に母として表象する。そして、“lover”=子、“beloved”=母、という構図が、実は母と娘の関係に他ならぬことを直接的に示した初期短編が一つだけある。その短編“Breath from the Sky”では、McCullers自身を思わせる病身のConstanceが、母親との間に微妙なすれ違いを感じている。娘に対してどこか冷たい素振りを見せる母親に、母親の愛を確かめるかのような言動を繰り返すConstanceの姿は、Constanceが“lover”であり、母が“beloved”であることを浮き彫りにする。Constanceと母親の関係に象徴されるように、McCullersの隠された意図は、母と娘の関係性を追求することであったが、前述したようにMcCullers自身の母親との濃密で複雑な関係が作品において直接的に母と娘を描くことをためらわせた。しかしながら、McCullersは幾重にもカモフラージュするかのように、母と娘の関係ではなく母と子の関係を、そして母と子の関係ではなく“beloved”と“lover”との関係を語り続けたのである。このように考えると、“lover”と“beloved”との関係を描くとき、“lover”の傷つきやすさだけではなく、“beloved”の後悔と罪悪感をすくいとろうとするMcCullersの姿勢には、母と娘の双方の言葉を語ろうという試みが存在しているといえるだろう。McCullersの作品において直接的に表象されることはない母は、このようにいわば隠された形で、自らの言葉を語ろうとしているのである。

母＝“beloved”の言葉を語ろうとするその姿勢は、もちろん、娘としての McCullers が母を理解しようとする、あるいは母につながろうとする願いでもあったのだろう。だが、McCullers の作品において、“beloved”と“lover”は“different countries”に住み続け、“beloved”の後悔は“lover”に受け入れられることはなかった。母と娘が和解するには、*Clock* を待たなければならなかったのである。

Ⅲ *Clock Without Hands* における和解

前述したように、McCullers は *Clock* において初めて、親子の関係性を直接作品において主題として取り上げる。初期短編から *Lonely Hunter*、*Ballad* へと秘かに追求されつづけた母と娘の関係は、*Clock* の複雑な人間関係の中で変奏され、それまでの作品とは異なる結末にいたる。その変化は既に“The Haunted Boy”において予兆されたものだった。母に対して怒りを抱いていた Hugh だが、物語の結末では、

He knew that something was finished; the terror was far from him now, also the anger that had bounced with love, the dread and guilt. Although he felt he would never cry again — or at least not until he was sixteen — in the brightness of his tears glistened the safe, lighted kitchen, now that he was no longer a haunted boy, now that he was glad somehow, and not afraid. (177)

とあるように、母への怒りを自分なりに昇華し、大人への階段を一步無事に登ったことが示されるのである。言うまでもなくこれは、“It was like she was cheated” (302) と失望のうちに大人への階段を登られる Mick とは対照的だ。Mick が誰かに、あるいは何かに「だまされた」と感じたまま物語が終わることで、思春期の少年少女の孤独と疎外感が浮き彫りにされるのに対し、Hugh は無事に不安定な時期を乗り越えようとしている。さらに、“beloved” (= 母) に対して抱いた怒りや憎しみから逃れることのできた Hugh の姿には、“beloved”と“lover”がもはや“different countries”に住むのではなく、お互いに歩み寄る姿が表象されているといえる。つまり、“lover”と“beloved”との和解が“The Haunted Boy”の主題となっているのだが、この主題こそ

が McCullers が *Clock* においてさらに追求しようとしたものなのである。

もちろん、*Clock* はそれまでの McCullers の作品とは趣が異なり、社会的背景や時代性が強く反映された設定となっている。特にこの点が、McCullers の主題として好んで論じられてきた孤独や疎外感といった要素の普遍化の妨げとなり、*Clock* が批判される要因となっているのだろう。たしかに、Adams が試みているように、*Clock* における“the freak and the queer”の概念を考察するには、第二次世界大戦の終結、冷戦下の社会的風潮、公民権運動といった1950年代のアメリカという時代背景を視野に入れることが求められる(552)。しかしながら、作品全般に浸透している特に人種問題に関する意識は、作品の中心的主題というよりはむしろ親子間の断絶を強調する機能を果たしているにすぎない。McDowell が指摘するように、人種問題や階級問題といった社会的背景はあくまでも“primarily as realities which magnify loneliness, isolation, and internal conflict”という要素でしかない(115)。McCullers は親子の断絶と世代間の隔絶を前面に押し出し決定的なものとするために、人種問題に対する新旧世代の考え方の違いを作品に取り入れたとさえいえるだろう。南部において、古い世代の保守的な考えと新しい世代の考え方が如実に反映されるのが人種問題であり、人種に対する意識のずれは親子間の断絶をより明らかにする格好の契機となるからだ。そして、その断絶は、*Clock* における和解の意義をより強調する役目を果たしているのである。

Clock における世代間の隔絶は、三世代にわたって繰り返されることになる。旧南部の保守的な考えの持ち主の Judge Clane と息子の Johnny Clane との間に、そして、Judge Clane の孫であり Johnny の息子である Jester Clane との間で。Judge Clane と自殺した Johnny Clane との間に何があったのか、という真相は作品の最後になって明らかになるわけだが、白人至上主義と旧南部における奴隷制度の正しさを信じて疑わない Judge Clane と、リベラルな思想の持ち主である孫の Jester のすれ違いから、どのような出来事が父と息子の間にあったのか容易に推察できる設定となっている。実際、Johnny は、白人を殺害したとして逮捕された一人の黒人を救おうとするのだが、その裁判で有罪の判決を下したのは他ならぬ Judge Clane だった。その直後、Johnny は自ら命を断つのである。“We were more like brothers than father and son. Blood twin brothers”(764)と感じていた息子 Johnny の自殺に長年苦しめられてきた Judge Clane の姿は描かれているが、旧南部の大義に取り付

かれた Judge の精神では息子の行為を理解することができず、また、Johnny が自殺した今となつては、2 人の断絶は修復しようがない。それは次の世代、つまり孫の世代の Jester によつてもたらされることになる。

Jester はいわば二重に作品の結末に許しと和解をもたらす人物である。Mick や Frankie と同じく思春期特有の不安や疎外感に苦しむ少年 Jester は、混血の少年 Sherman Pew と知り合い強く惹かれていくが、Sherman は Jester に対して絶えず辛くあたる。“Sucker” から続く、“lover” と “beloved” との関係がここでも繰り返されているのである。Jester 側には homosexual な欲望があったといえるかもしれないが、Adams が “the term *homosexuality* does not adequately capture the wide array of erotic identifications and groupings that appear among her characters” (555) と指摘しているように、ここで McCullers が意図しているのは Jester と Sherman の homosexual な関係の表象ではなく、“lover” = Jester と “beloved” = Sherman とのもつれた関係を描くことにある。⁵ Jester と Sherman の関係が、それまでの McCullers の作品の人物たちと大きく異なっているのは、Jester は Sherman にどれほど残酷な仕打ちを受けようとも Sherman を受け入れ許しを与える点だろう。自分の出生の秘密を知って動揺する Sherman が Jester の愛犬の命を奪ってしまつても、Sherman を崇拜する Jester はそれでもなお、Sherman の命が狙われていることを知ると、“Forget the dog. The dog is dead. And I want for you to be living always” (794) と Sherman の命を救おうとする。ここにおいて、“lover” = Jester は “beloved” = Sherman に対する怒りや恨みを忘れ、許しを与えるのである。

さらに、Jester が物語の結末で取った決断は、結果として、Sherman だけではなく、親代わりに自分を育ててくれた祖父の Judge Clane に対しても間接的に許しを与えることとなる。白人居住区に家を借りて住む、という自殺行為の結果、爆弾を投げ込まれ無惨な死を遂げる Sherman だが、その Sherman の殺害を計画したグループの一人が他ならぬ Judge Clane だった。Jester は Sherman の復讐のため、殺害の実行犯である Sammy Lank を連れ出し命を奪おうとするが、Sammy の貧しい生活を知るにつれ、次第に怒りも憎しみも消え失せ、そのまま Sammy を解放することで、Sammy とそして祖父をも許すのである。そして、“His odyssey of passion, friendship, love, and revenge was now finished” (798) とあるように、Jester は “The Haunted Boy” の Hugh と同じく、無事に大人への階段を一步登っていくのだ。

このように、*Clock* においては、“Sucker” や *Lonely Hunter*、そして *Ballad* において描かれた、“lover” の深く強い苦しみと怒りは昇華され、思春期の少年は無事に大人への移行期を通り過ぎようとする。いわば、“lover” と “beloved” という形を取って追求されてきた母と娘のからみあう関係は、ここにいたって、ようやく娘からの和解が与えられたのである。

IV 母の言葉

Clock が McCullers のそれまでの作品と大きく異なる点は、もう一つある。それは、母の不在そのものに焦点が当てられ、不在の母を追い求めるというエピソードが導入されているところである。また、ここにおいて、“beloved” = 母の言葉をすくいとりうとしてきた McCullers のそれまでの試みが新たな展開を迎えることになる。

青い瞳を持つ混血の Sherman Pew は、幼い頃から自分の父親は白人で母親が黒人であり、自分はレイブによって生まれた子供だと空想し、顔さえしらない母親がどのような人物なのか追い求めてきた。だが、実は Sherman の父親が黒人であり母親の方が白人であった。不幸せな結婚生活を送っていた Sherman の母親 Mrs. Little は、黒人の Sherman Jones を愛するようになるが、夫の Ossie Little にそのことを発見され、結局、正当防衛から Jones は Ossie Little を殺害してしまう。2 人の間に生まれたのが Sherman であった。Jester の父である弁護士 Johnny Clane は理想主義的な弁論で Jones を弁護しようとするが、Jones を守ることはできなかった。また、この事件の過程で、Johnny は Mrs. Little を愛するようになっていた。Johnny = “lover” に、Jones が死刑になったあと、Mrs. Little = “beloved” は次のような言葉を投げつける。

She hated him and told him so. She cursed him for being a fumbling lawyer, for airing his own ideas of justice at the expense of his client. She cursed and accused Johnny, maintaining that if he had conducted the case as a cut-and-dried matter of self-defense Sherman Jones would be a free man now. A dying woman, ranting, wailing, grieving, cursing. She said that Sherman Jones was the cleanest, most decent man she had ever known and that she loved him. (771)

ここにいたって、McCullers の作品においては初めて、母が自らの言葉で自らの思いを語る機会を与えられ、深い悲しみと憎しみを吐露することを許される。これまで“beloved”という形をとってのみ自らの後悔や罪悪感を表現することを許されてきた母が、初めて母そのものとして、自らも“lover”と同じような苦しみを味わっていることを自らの言葉で明らかにしたのである。ここで初めて McCullers は、母自らに、自らのために語らせたのだ。

母の言葉を語ろうとする McCullers の試みは、Marianne Hirsch が *The Mother/Daughter Plot* において、母が主体性を獲得するために必要であると主張している“maternal discourse”につながるものがある(197)。

Rather than daughters having to “speak for” mothers, mothers would be able to speak for themselves, perhaps “with two voices.” Only thus can mothers and daughters speak to one another. Only thus could the plots of mothers and daughters become speakable. (197)

“lover” と “beloved” の関係に隠された母と娘の葛藤は、McCullers 最後の作品において、娘からの許しと母の言葉によって、いわば双方からの歩み寄りによって昇華されることになったのである。二つの声に語らせることによって初めて、Hirsch が述べているように、母と娘は互いに互いの声を届けることができるのだから。いわば、McCullers のこれまでの作品は、*Clock* における許しと和解につながるための通過点であったとさえいえるのかもしれない。このように、*Clock* は McCullers における母と娘の言説が集約された作品として大きな意義を持つのである。

註

- 1 *Clock* に関する評価の流れについては、Judith Giblin James の143-164に詳しい。
- 2 Carr の16, 417を参照。
- 3 Westling の36-64を参照。
- 4 McCullers の作品における母の不在と、McCullers 自身の母親との関係については、Savigneau が “Every day she [McCullers] mailed a letter to her mother, receiving one with the same regularity We know, however, that the mothers in Carson McCullers’s novels — except for the first one, where Mick’s mother remains very much in the background — have all disappeared. Only after 1955, the year Marguerite Smith [McCullers’s mother] died, do mothers reappear in Carson’s texts” (39) と端的

に指摘している。

- ⁵ Lori J. Kenschaft も同じく、“Few of McCullers’s characters are adequately described as homosexual” (226) と指摘している。

Works Cited

- Adams, Rachel. “A Mixture of Delicious and Freak: The Queer Fiction of Carson McCullers.” *American Literature* 71.3 (1999): 551-583.
- Carr, Virginia Spencer. *The Lonely Hunter: A Biography of Carson McCullers*. 1975. Athens and London: U of Georgia P, 2003.
- Hirsch, Marianne. *The Mother/Daughter Plot: Narrative, Psychoanalysis, Feminism*. Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 1989.
- James, Judith Gibling. *Wunderkind: The Reputation of Carson McCullers, 1940-1990*. Columbia: Camden House, 1995.
- Kenschaft, Lori J. “Homoerotics and Human Connections: Reading Carson McCullers ‘As a Lesbian.’” Eds. Beverly Lyon Clark and Melvin J. Friedman. *Critical Essays on Carson McCullers*. New York: G. K. Hall, 1996. 220-233.
- McCullers, Carson. *The Ballad of the Sad Café*. 1951. *Carson McCullers: Complete Novels*. New York: The Library of America, 2001.
- _____. “Breath from the Sky.” *The Mortgaged Heart: Selected Writings*. Ed. Margarita G. Smith. 1971. Boston: Mariner-Houghton Mifflin, 2005. 39-48.
- _____. *Clock Without Hands*. 1961. *Carson McCullers: Complete Novels*. New York: The Library of America, 2001.
- _____. “The Haunted Boy.” *The Mortgaged Heart: Selected Writings*. Ed. Margarita G. Smith. 1971. Boston: Mariner-Houghton Mifflin, 2005. 164-177.
- _____. *The Heart Is a Lonely Hunter*. 1940. *Carson McCullers: Complete Novels*. New York: The Library of America, 2001.
- _____. *The Member of the Wedding*. 1946. *Carson McCullers: Complete Novels*. New York: The Library of America, 2001.
- _____. “Sucker.” *The Mortgaged Heart: Selected Writings*. Ed. Margarita G. Smith. 1971. Boston: Mariner-Houghton Mifflin, 2005. 9-19.
- McDowell, Margaret B. *Carson McCullers*. Boston: Twayne, 1980.
- Richards, Gary. *Lovers and Beloveds: Sexual Otherness in Southern Fiction, 1936-1961*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2005.
- Savigneau, Josyane. *Carson McCullers: A Life*. Trans. Joan E. Howard. Boston: Houghton Mifflin, 2001.
- Westling, Louise. *Sacred Groves and Ravaged Gardens: The Fiction of Eudora Welty, Carson McCullers, and Flannery O’Connor*. Athens: U of Georgia Press, 1985.